Human

研究機関の技術支援職として

九州第２業務科　筑後技術チーム
澤田　道伸（さわだ　みちのぶ）

現場で農業に関わる仕事へ

私は2020年4月に中途採用で農研機構へ入構しました。それまでは民間企業に5年間勤め、農家さんをお客さんとして、スーツを着ての営業や事務作業が中心でした。しかし、兼業コメ農家という環境で育った私にとって、身体を動かす農作業は生活の一部であったことから、作業着を着て農業の現場に関わるほうが自分に合うと感じていました。試験研究機関であれば様々な農業の技術・知見にも触れられると考え、農研機構に転職しました。現在、筑後の研究拠点にて作物育種グループの稲育種研究支援に従事しています。

稲育種の支援業務

2022年5月に、新潟県上越市にある北陸研究拠点の業務科にて1週間研修に参加する機会をいただきました。筑後の研究拠点と同様に稲育種研究への支援業務を行う北陸の業務科職員から筑後とは違う方法を学び、筑後の研究拠点に戻って取り入れることを提案しました。例えば、手刈り作業を機械作業に変更することです。1日当たり約50区を補助者含めて6人で収穫していた作業が、機械で刈ると1日40区を補助者含めて2人で刈ることができるようになり、収穫後の結束数も減らすことができました。時間が空いた職員は他の業務にあたることができ、農繁期の作業負担が少なくなったという声をいただけました。機械操作技能や栽培技能を持つ技術屋としての仕事をしたいと思っていたので、それができる技術支援系の仕事にとてもやりがいを感じています。他にも私のアイデアを取り入れていただき、効率化や改善につながったときもあります。提案を受け入れていただけるのはとてもありがたいです。中にはハードルが高い改善提案もありますので、業務科の同僚、先輩、上司、担当する研究グループの皆さまの支えや理解を感じ、とても恵まれた環境にいると思います。提案等を聞いてもらえるように研究グループと普段からコミュニケーションをとること、ただ作業指示を受けるだけでなくその意図や実施理由について確認することにも気を付けています。

これからのこと

技術支援系職員は、研究の担当者として名前が世に出ることはないですが、研究成果を陰から支える縁の下の役割であり、日本の農業の発展に貢献しているという気持ちを大切にしていきたいです。まだまだ経験が浅く学ぶことばかりですが、幅広い視点から研究成果の最大化を目指した支援が提供できるように日々の業務に向き合っていきたいと思います。

▲筑後で育成された品種の採種の様子